

次の文章は『雛』（芥川龍之介 作）という小説の一部です。前書きもよく読んで後の問いに答えなさい。

（前書き）

「わたし（お鶴）」は今は老女となつて、少女（十五歳）のころのことを思い出し、話している。「わたし」の父は江戸時代には大きな商家であつたが、明治維新に伴つて様々な損をし、火事にもあつてめぼしい道具もあらかた一家の生活のために売りはらつていた。しかし父は、骨董屋の丸佐の主人に度々勧められ、でも「わたし」をかわいそうに思つて、雛人形を手放すことだけはためらつていた。それを売らせたのは英吉という兄であつた。兄は文明開化の影響を受けた人間で、雛は古く実用にならないと父に言つていた。そして、とうとう骨董屋の仲介で横浜のアメリカ人に雛を売ることになった。雛を手放す約束ができたときには、「わたし」はそんなに悲しいとは思わなかつたが、約束の日が近づいてくると父にせがんでもう一度雛をみせてもらおうとした。しかし、父はそれを決して許そうとはしなかつた。「わたし」はそのことで兄と何度もけんかをした。そうしているうちに母は顔がはれる病氣になつた。ある日兄と「わたし」がけんかをし、母も「わたし」をかばつて言い争いになつた。しばらくしてから父は兄に、丸佐に頼んでおいたランプを受け取りに行くように命じた。新しいものの好きの兄もランプの購入に大賛成であつた。そのあと、かつて父にやとわれていて今は人力車の車夫になつた「徳蔵」が、「わたし」を人力車に乗せてやろうとやってきた。

「どうする？ お鶴。」

父はわざとまじめそうに、人力車を見^{※1}に見世へでていたわたしの顔をながめました。今日では人力車に乗ることなどはさほど子どももよろこびますまい。しかし当時のわたしたちにはちやうど自動車に乗せてもらうくらい、うれしいことだったのでございます。が、母の病氣ともうし、ことにああいふ大さわぎのあつたすぐあとのことでございますから、いちがいにゆきたいとももうされません。わたしはまだしよげきつたなり、「ゆきたい。」と小声に答えました。

「じゃあお母さんに聞いてこい。せつかく徳蔵もそういうものだし。」

母はわたしの考えどおり、目もあかずにほほえみながら、①「上等だね」ともうしました。意地のわるい兄はA いいあんばいに、丸佐へでかけたるすでございます。わたしはないたのもわすれたように、^a人力車にとび乗りしました。赤毛布をひざかけにした、輪のがらがらと鳴る人力車に。

そのとき見て歩いた景色などは、もうし上げる必要もございますまい。ただいまでも話に出るのは徳蔵の不平でございます。徳蔵はわたしを乗せたまま、煉瓦の大通りにさしかかるがはやいか、西洋の婦人に乗せた馬車と^b衝突しかりました。それは^c助かりましたが、^d舌打ちをすると、こんなことをもうすのでございます。

「どうもいけねえ。お嬢さんは^e軽すぎるから、かんじんの足がふんどまらねえ。……お嬢さん。乗せる車屋がかわいそうだから、二十まえにやあ車へお乗んなさんなよ。」

人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町をまがりました。するとたちまちであつたのは兄の英吉でございます。兄は煤竹の柄のついた置きランプを一台さげたまま、いそぎ足にそこを歩いておりました。それがわたしのすがたを見ると「まで。」ともうす合図でございましょう、ランプをさしあげるのでございます。が、もうそのまえに徳蔵はぐるりとかじ棒をまわしながら、兄の方へ車をよせておりました。

「ご苦労だね。徳さん。どこへいったんだい？」

「へえ、なに、今日はお嬢さんの江戸見物です。」

兄は②苦笑をもらしながら、人力車のそばへ歩きました。

「お鶴。お前、先へこのランプをもつていってくれ。わたしは油屋へよってゆくから。」

わたしはさっきのけんかのBでまえ、わざとなんとも返事をせずに、ただランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、きゆうにまたこちらへむきかえると、人力車のどろよけに手をかけながら、「お鶴。」ともうすのでございます。

「お鶴、おまえ、またお父さんにお難さまのことなんぞいうんじやあないぞ。」

わたしはそれでもだまっておりました。あんなにわたしをいじめたくせに、またかと思ったのでございます。

しかし兄はC頓着せずに、③小声のことばをつづけました。

「お父さんが見ちゃあいけないというのは手付けをとったばかりじゃあないぞ。見りやあみんなに未練が出る、——そこも考えているんだぞ。いいか？ わかったか？ わかったら、もうさっきのように見たいのなんのとうんじやあないぞ。」

わたしは兄の声のなかにいつにない情あいを感じました。が、兄の英吉くらい、妙な人間はございません。やさしい声をだしたかと思うと、こんどはまたふだんのとおり、突然わたしをおどかすようにこうもうすのでございます。

「そりやあいいたりやあいつでもいい。そのかわりいたい目にあわされると思え。」

兄は憎体^{にくてい}にいいはなつたなり、徳蔵にもあいさつもなにもせずに、さつさどこかへいつてしまいました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土蔵の中に、夕飯の膳^{ぜん}をかこみました。もつとも母はまぐらの上に顔をあげただけでございますから、かこんだものの数にははいりません。しかしその晩の夕飯はいつもよりはなやかな気がしました。それはもうすまでもございせん。あのうす暗い無尽灯^{※2 無尽灯}のかわりに、今夜は新しいランプの光がかがやいているからでございます。兄やわたしは食事のあいまも、ときどきランプをながめました。石油を透^すかしたガラスのつぼ、うごかない炎^{※3 炎}をまもった火屋、——そういうもののうつくしさに満ちためずらしいランプをながめました。

「明るいな。昼のようだな。」

父も母をかえり見ながら、満足そうにもうしました。

「まぶしすぎるくらいですね。」

こうもうした母の顔には、ほとんど④不安に近い色がうかんでいたのでございます。

「そりやあ無尽灯になれていたから……だが一度ランプをつけちゃあ、もう無尽灯はつけられない。」

「なんでもはじめはまぶしすぎるんですよ。ランプでも、西洋の学問でも、……。」

⑤兄はだれよりもはしやいでありました。

「それでもなれりやあおなじことですよ。いまにきつとこのランプも暗いというときがくるんです。」

「大きにそんなものかもしれない。……お鶴。おまえ、お母さんのおも湯はどうしたんだ？」

「お母さんは今夜はたくさんなんですって。」

わたしは母のいったとおり、なんの気もなしに返事をしました。

「こまったな。ちつとも食気がないのかい？」

母は父にたずねられると、しかたがなさそうにため息をしました。

「ええ、なんだかこの石油のにおいが、……旧弊人^{※4 旧弊人}の証拠^{しやうこ}ですね。」

それぎりわたしたちはことばずくなに、はしばかりうごかしつづけました。しかし母は思い出したように、ときどきランプの明るいことをほめていたようでございます。あのはれあがったくちびるの上にも微笑^{ほほえみ}らしいものさえうかべながら。

その晩もみな休んだのは十一時すぎでございます。しかしわたしは目をつぶっても、容易にねつくことが出来ません。兄はわたしに雛のことは二度というなともうしました。わたしも雛を出して見るのはできない相談とあきらめております。が、だして見たいことはさつきとすしもわかりません。雛はあしたになったが最後、遠いところへいつてしまう、——そう思えばつぶった目の中にも、しぜんとなみだがたまってきます。——いっそみんなのねているうちに、そつと一人だして見ようか？——そうもわたしは考えてみました。それともあのの中の一つだけ、どこかほかへかくしておこうか？——そうもまたわたしは考えてみました。しかしどちらもみつかったら、——と思うとさすがにひるんでしまいます。わたしは正直にその晩くらい、いろいろおそろしいことばかり考えたおぼえはございません。⑥今夜もう一度火事があればいい。そうすれば人手にわたらぬまえに、すつかり雛も焼けてしまう。さもなければアメリカ人も頭のはげた丸佐の主人もコレラになってしまえばいい。そうすれば雛はどこへもやらずに、このままだいじにすることができ。——そんな空想もうかんでまいります。が、まだなんともうしても、そこは子どもでございますから、一時間たつたたないうちに、いつかうとねむってしまいました。

それからどのくらいたちましたか、ふとねむりがさめてみますと、うす暗い行灯^{あんどん}をともした土蔵にだれか人の起きているらしい物音が聞こえるのでございます。ねずみかしら、どろぼうかしら、またはもう夜明けになったのかしら？——わたしはどちらかとまよいながら、おずおず細目をあいて見ました。するとわたしのまくらもとには、ねまきのままの父が一人、こちらへ横顔を向けながら、すわっているのでございます。父が！……しかしわたしをおどろかせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、——お節句以来見なかった雛がならべたてであるのでございます。

ゆめかと思うともうすのはああいふときでございます。わたしはほとんど息もつかずに、このふしぎを見まもりました。おぼつかない行灯の光の中に、象牙^{ぞうげ}の笏^{しやく}をかまえた男雛^{おびな}を、冠^{かんむり}の璎珞^{おうらく}をたれた女雛^{めびな}を、右近^{うこん}の橋^{はな}を、左近の桜を、柄の長い日傘^{ひがさ}をかついた仕丁を、目八分に高坏^{たかつき}をささげた官女を、小さい蒔絵^{まきえ}の鏡台やたんすを、貝殻^{かいがら}づくしの雛屏風^{ひやうぶ}を、膳碗^{ぜんわん}を、画雪洞^{えぼんぼり}を、色系の手鞠^{てまり}を、そうしてまた父の横顔を、……。

ゆめかと思うともうすのは、……ああ、それはもうまえにもうしあげました。が、ほんとうにあの晩の雛はゆめだったのでございますか？ いちずに雛を見たがったあまり、知らずしらずくりだした幻^{まぼろし}ではなかったのでございますか？ わたしはいまだにどうかすると、わたし自身にもほんとうかどうか、返答にこまるのでございます。

しかしわたしはあの夜ふけに、ひとり雛をながめている、年とった父を見かけました。これだけはたしかでございます。そうすればたといゆめにしても、べつだなくやさしいとは思いません。とにかくわたしは目のあたりに、わたしとすしもかわらない父を見たのでございますから、⑦めめしい、……そのくせおごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年かまえのことである。それをいま書きあげたのは瀧田^{たきた}氏のすすめによるのみではない。同時にまた四、五日まえ、横浜のあるイギリス人の客間に、古雛の首をおもちやにしている紅毛の童女にあつたからである。⑧いまはこの話に出てくる雛も、鉛^{なまり}の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱^{おもちゃ}に投げこまれながら、同じうきめをみているのかもしれない。

語注

※1 「見世」：「店」に同じ。

※2 「無尽灯」：昔のあかり。

※3 「火屋」：ランプの火をおおうガラス製の筒^{つつ}。

※4 「旧弊人」：古い習慣をがんこにおしとおす人。

※5 「瀧田氏」：雑誌の編集者。

問一

本文9行目～15行目にある空欄 a e に入る語句として最も適当なものを次のア～ケから選び、記号で答えなさい。(ただし同じ語は二度使えません。)

〔語群〕

ア. まるで	イ. きつぱり	ウ. まともに	エ. さつそく	オ. おそらく
カ. やつと	キ. いまいましたように	ク. あんまり	ケ. けつして	

問二

二重傍線部 A 「いいあんばいに」(9行目)、B 「てまえ」(25行目)、C 「頓着せずに」(30行目)の語の意味として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

A. 「いいあんばいに」 ア. よい気味で イ. 都合よく ウ. 調子がよく エ. いい気分 オ. いい時間に	B. 「てまえ」 ア. 立場もあつて イ. はずかしさもあつて ウ. うらみもあつて エ. 結果もあつて オ. 痛みもあつて
---	--

C. 「頓着せずに」 ア. 先ほどの話を適当にごまかしながら イ. なりふりをかまうわけでもなく ウ. 相手の苦しみを思いやるわけでもなく エ. 話の流れを切ることなく続けざまに オ. 深く気にかけることもなく

問三

本文8行目に傍線部①「『上等だね』ともうしました」とありますが、母はどのような気持ちでそのように言ったのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア. 雛を見たいと古いものにこだわりの続けた娘であつたので、その雛にかわるような何か新しいものを町で見つけて来てほしいという気持ち。

イ. 雛を見たいとわがままを言つてゆずらなかつた聞き分けのない娘が、徳蔵を召し使ひのように使うことに對していやみを言おうとする気持ち。

ウ. 雛を見たいと言つて兄とけんかをした強情な娘であるが、徳蔵といつしよに出かけることで二人が恋仲になつてほしいと期待する気持ち。

エ. 雛を見たいと言つて父に叱られ、兄ともいさかいをした娘がかわいそうだったので、人力車に乗つて気晴らしをさせてやりたいという気持ち。

問四

本文23行目に傍線部②「苦笑をもらしながら」とありますが、このときの兄の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア・先ほどまで雛を見たいと言って泣いていた聞き分けのないお鶴が、そのうさ晴らしに徳蔵を使っていることをあざけている。

イ・先ほどまで自分と大げんかをして泣いていたのに、それを忘れたかのようにお鶴が人力車に乗って出かけていることにあきれている。

ウ・先ほどまで雛を見たいと言っていた強情なお鶴が、好意をよせてくれている徳蔵と一緒に出かけているのをお調子者だと思っている。

エ・先ほどまで古いものにこだわって泣いていたのに、今は慣れ親しんだ東京で新しい楽しみをさがそうとしているお鶴をばかにしている。

問五

本文30行目に傍線部③「小声のことばをつづけました」とありますが、兄はどうして小声だったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア・自分の考えを押し通すためではなく、家族のことを気にかけて徳蔵に聞かれないように妹をこっそりさとそうとしたから。

イ・けんかをしたことは早くも忘れてしまい、家族の中での妹の立場を気にかけて徳蔵には気づかれないようにかわいがろうとしたから。

ウ・けんかしたことを根に持っているのに、妹のプライドに配慮して徳蔵の前ではさも表面上仲がいいようにふるまおうとしたから。

エ・本当は古いものにこだわる父や母を憎んでいるが、妹のことも気にかけて雛を見てはいけない理由をわからせようとしたから。

問六

本文48行目に傍線部④「不安に近い色」とありますが、このときの母の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア・何事もちょうどよい程度というものがあるのであって、度をこすとありがたく思えないことがある。

イ・今まで慣れ親しんだものたちがうランプの明るさによって、母がいらだっている。

ウ・明るさがありがたく思う人がいるけれども、なじむことができずに落ち着かない人もいる。母自身、病気であおむけに寝ていることが多いために、明るさをかえってめいわくだと感じている。

エ・これまで体験したことのないランプの明るさにおどろき、おびえに近いものを感じている。病気の心細さも加わって、世の中の流れから母自身がとり残されるような気分も味わっている。

オ・新しいものがよいと坎ちがいしている人がいるが、古くても使えるものは多い。使えるものまでも捨ててしまうような風潮とともに、母自身も家族から捨てられてしまうことを予感している。

問七 本文51行目に傍線部⑤「兄はだれよりもはしやいでおりました」とありますが、このときの兄の気持ちはどのようなものですか。七十字以内で説明しなさい。(句読点も一字として数えます。以下同じ。)

問八 本文69行目に傍線部⑥「今夜もう一度火事があればいい。そうすれば人手にわたらぬまえに、すっかり焼けてしまう」とありますが、このときの「わたし」の気持ちはどのようなものですか。五十字以内で説明しなさい。

問九 本文90行目に傍線部⑦「めめしい、……そのくせおごそかな父を見たのでございます」とありますが、ここに見られる父の姿は「わたし」の目にはどのように映っていたのですか。百字以内で説明しなさい。

問十 本文93行目から96行目までは作者の言葉です。
本文95行目に傍線部⑧「いまはこの話に出てくる雛も、く同じうきめをみているのかもしれない」とありますが、ここにこめられている作者の気持ちはどのようなのですか。五十字以内で説明しなさい。

問十一 次の①～⑩の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 買いたい本を出版社にシヨウカイしたが、手に入らなかった。
- ② 事故現場は混乱してシユウシユウがつかない状態だ。
- ③ 学者のすぐれたコウセキに対して賞を与える。
- ④ 社会全体のことを考え、シジヨウを捨てる。
- ⑤ 深く考えずにヒソウな理解にとどまっている。
- ⑥ あまりにもヨウリヨウが悪くて時間切れになる。
- ⑦ 今では大会社だがソウソウ期は小さな工場だった。
- ⑧ 事業を起こす上でサイサンを考える。
- ⑨ 最上級生としてユウシユウの美をかざることができた。
- ⑩ 最終的な判断はセンモン力にまかせる。

a
b
c
d
e

A
B
C

問三

問四

問五

問六

[illegible][illegible][illegible][illegible]

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

※	評	点

受験番号
氏名